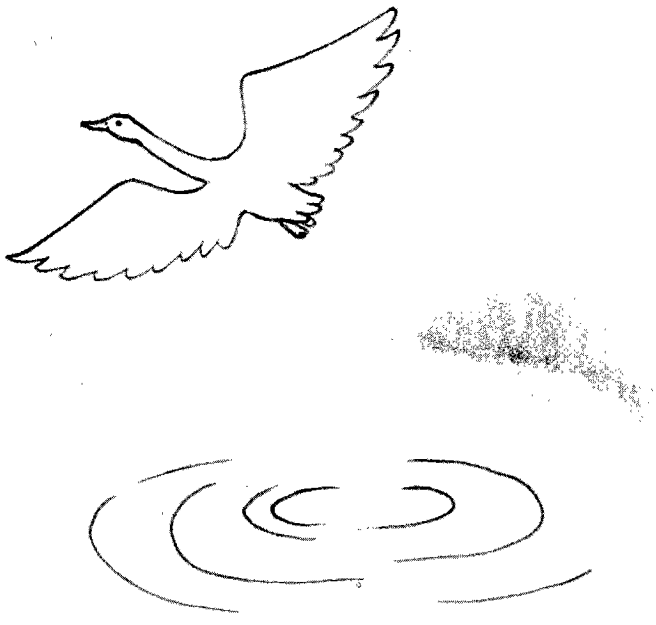
SEの知恵袋

第19回 21世紀型SEの期待

野口 尚男 京葉システム（株）
妹尾 稔 名古屋商科大学



絵 細田直子

SEをとり巻く環境の変化

ベンチャーの育成がこれからの日本経済発展のための鍵になるといわれているが，それを支える人材が少ないためなかなかベンチャーが育たないといわれている．優秀な人がいても日本を見限り海外へ転出する傾向があるのでなおさらである．日本のIT企業が人材確保に大変な苦労をしているのもこのためかもしれない．一般の情報技術者またはこれを目指す人たちにとって，ますます多様化し専門化している中で進むべき道の選択は難しい．しかも変化の激しい分野のため，いま陽が当たっていても明日には日陰にならないとも限らない．これは今の中堅SEたちがここ数年に体験したことである．人材を登用する企業側の立場としても即戦力を求めざるを得ない．情報技術者が自分の力を評価してくれるところで働きたい気持を持っていても，適職に出会えることはそう簡単ではない．

これを裏付けるかのように情報技術者のリクルート活動が活発であり，「求職フェア」がシーズンなく盛んに行われている．

経営側が求めているのは即戦力のみならず特定分野のハイレベルな人材である．しかも関連の業務知識について詳しいことを求めるので期待どおりの人材に出会えることは稀である．まして先進的情報技術の事業を展開している企業では，ITの専門的知識の深さが鍵で，真に求める人材に出会えることはまさに千載一遇なのかもしれない．

情報技術者の思惑

このようにニーズの高いIT専門家を目指して新卒者がどんどん世の中に送り出されているが，社会に出てからの基本姿勢に問題を感じることが多い．自分の実力がどの程度社会的に受け入れられるのか，足りないものは何か，どのような自己啓発が必要なのか，またどのようなキャリアプランを持つべきなのか，という考えをしっかり持っていないケースをよく見かける．就職した企業でITの経験を積み，多くを学びとって少しでも高いレベルのIT資格をとりたい，と考えるのはよいが，とった資格を看板に高収入の得られるところへ転出しようと考える傾向が強い．

自己を正しく分析し専門分野のみならず，自分の短所や足りない面も冷静に改善しようということであればよいが，IT中心だけで判断しその企業にいられたのでは会社はたまったものでない．経営者から見れば縁があって我が社にきてくれたのであり，じっくり育てて稼げる人材になってもらいたいと思っているのである．

SEはもっと経営の視点を

日本のSEが欧米のそれと違うのは「マーケットイン・マインド」が足りないといわれる．学んだ知識や自分の持っている技術がすぐ活かせるのであるならこんな幸せなことはない．企業にはそれぞれ特有のニーズがあってそれに応えられる知識・能力が必要であり，それは必ずしもITのことばかりではない．ある場合には大切なお客の業務知識であったり，汗水たらして学ばねばならない現場経験であったりする．ところが，日本のSEたちの多くが，このようなことを軽視し技術偏重があるように思えてならない．とくに転々とする技術者たちにこの傾向がある．

もし，あなたが実績を持っているSEなら次のようなことを自問自問していただきたい．

①お客の利益やコスト改善にどれだけ貢献したか．
②システムは継続的に十分な性能を発揮しているか．
③思いもよらないメンテ費用がかかっていないか．
④自信をもって顧客に納入したシステムでも，もし他のSEがやっていればもっとよいシステムができていたのではないか．

このように自分を冷静にチェックしてみると今後の自己啓発に役立つだろう．もしこれらの項目で思いあたることがあれば，それは経営的視点が足りなかったために違いない．

バランスのとれたSEとは

SEは情報技術者である以前に豊かな社会常識を備えていなければならない．朝笑顔で挨拶ができるSEがどうも日本には少ないように思える．ある企業が技術者に対し，プロとして，高度情報技術サービスを担うことのできる人材とは，

①社会人として基本動作が身についていること
②人間性が豊かであること
③業務遂行能力があること
④知識スキル，資格を有していること
⑤向上心自己啓発の意欲があること

と定義している．

これらはどれもが大事であるが，上の2つを特に前に出していることに注目したい．SEはもとよりこれから情報技術者を目指す人たちはぜひ心していただきたいことである．

企業は利益をあげていかなければ存続はあり得ない．SEは「うまく経営するのはSEではなく経営者ではないのか」と考えがちであるが，そうではない．SEこそ経営の視点に立って仕事に当たらなかったらよいシステムができるはずがない．あるSEは「高いレベルの技術を駆使して作り上げたのだから使えない方が悪い」とか，「このシステムは最高の品質で技術的にも高い評価を得ている」という言い方をする．これに対して経営者は「変化の激しい今，生き残りできるシステムであるかどうかが重要で，短期間に低コストで作って欲しい」と．

21世紀型SEとは

まずは人間的にも社会常識的にもバランスのとれたSEが求められる．ITについては基礎知識を広く持ち，誰にも負けない専門技術とその周辺技術の知識があり，チームワークを重んじることのできることが大切である．自分自身を経営の中核に置いて自分が経営者だったらどう考えるか，という視点を持つことが21世紀型のSEである．

「キャリアプランの一環としてこの企業にいる」と考えているSEに言いたいのは，「もし自分を向上させたいなら，今の会社を発展させるために全力投球をして経営的に評価できる実績を作ること．そうすればSEとしての価値が高まることは間違いない．どうしても異動してキャリアアップを図りたいなら，いまの会社に迷惑のかからないリードタイムをとり上層部と話し合って円満に進めて欲しい」と．

新卒者で採用されたIT技術者が真に会社に役立つまでには7～8年はかかっている．それまでは会社の中の居候であったことを忘れないで欲しい．もし他で仕事をしたいのであればきちんと「恩返し」をし，自分の考えを早い段階で上司に伝え，お互いに気持ちよく円満に進めてもらいたいものである．

もし世間に通用する一流SEを目指すなら社会的に汚点を残すことなくきれいに飛び立っていって欲しいし，できることなら日本を支えるベンチャー起業家になってもらいたい．

むすび

ITC（ITコーディネータ）という資格制度が生まれた．これは情報システムと経営の乖離を埋める役割を持たせた人材を育成するためにできたものである．現状の経営ニーズとITソリューションの間に今なお深い溝があるために生まれたのである．これまでSEにいかに経営的視点が足りなかったか，スピードとコストへの配慮が不足していたかを物語っている．

ITCは経営の知識を備え，SEとして技術力があり，経営ニーズとしてのITソリューションを担える人材をいう．SE諸君がその近傍にいることを認識し，ITCを自己啓発の目標にしていただきたい．

参考文献
1）馬場史郎: SEを極める, 日経BP社.
2）高梨智弘ほか: ITコーディネータ資格ガイド, 東洋経済新報社.
3）企業求人情報（インターネットのホームページより）.

（平成13年9月5日受付）